ブラジル旧共和制下のエリート体制

大統領の系譜を中心として

（京都外国語大学）住　田　育　法

はしがき

本稿は，第１４回ラテン・アメリカ政経学会全国大会 ── 神戸大学経済経営研究所にて１９７７年１１月１３日開催 ── に発表し，さらに京都外国語大学 COSMICA VII（昭和５３年３月）誌上に執筆した「ブラジル旧共和制体期の一考察 ── そのエリート体制の構造的分析」の継続研究である。さきの論文では地方の分権的エリートの構造分析に終始したが，ここでは，その連邦政府の非常な権威をもった正・副大統領及び主要閣僚に焦点を合わせてそれがいかに強力なエリート的系譜であったかを検討しようとしたものである。そのため以下第一章では，正・副大統領及び主要閣僚の指名，就任をめぐる系譜図，第二章においては，歴代大統領のエリート的性格を出生地，学歴，地位及び名誉職などから図示したものを掲げ，これらの図表を中心に説明を行った。

第一章　連邦政府におけるエリート系譜の分析

ブラジルの連邦政府の構造がいかに閉鎖的なエリート系譜によって形成され，これがいわゆる第一次共和制期における特徴となったかを，特に正・副大統領に焦点を合わせて，早速以下の諸表で示してみよう。より具体的には，常に巨大な権威をもった[1]大統領の当選がいかに前大統領の指名，推薦に大きく影響されていたか，また有力者がいかに間断なく歴代の閣僚としてエリート的体制を維持したかを示したものである。

まず，大統領，副大統領そして主要な閣僚の指名，就任の状況を系譜的に図示し，最高の権威をもっていた大統領については特に指名及び立候補の背景を要約して載せておいた（＊印の部分がその説明である）。

時代区分及び大統領指名，立候補など	首長及び大統領とその任期	副大統領	エリート的閣僚
１８８９年ー革命（軍部） 〔Primeira República＝República Velha旧共和政体〕[2] １８８９－１８９８年 新体制の第一期[3]	デオドロ・ダ・フォンセッカ元帥 （AL→RS） １８８９年 〜 １８９１年 （臨時政府の首長）		法相カンポス・サーレス（SP） 陸相フロリアーノ・ペイショット（AL）
＊デオドロは議会における間接選挙によって選出 １８９１年 共和制第１次憲法発布	デオドロ・ダ・フォンセッカ元帥 １８９１年２月 〜 １８９１年１１月辞任	フロリアーノ・ペイショット陸軍元帥	蔵相ロドリゲス・アルヴェス（SP）
＊対立候補ブルーデンテ・デ・モライス ＊フロリアーノ・ペイショットがブルーデンテを次期大統領に指名	フロリアーノ・ペイショット元帥 １８９１年昇格 〜 １８９４年		蔵相ロドリゲス・アルヴェス
＊SP支持，ブラジル最初の国民投票による選出	ブルーデンテ・デ・モライス（SP）	マヌエル・ヴィトリーノ（BA）	蔵相ロドリゲス・アルヴェス
１８９４－１９１０年 旧体制の進行と完熟[4]	１８９４年 〜 １８９８年		産業相ジョアキン・ムルチーニョ（MT）

＊SPと前大統領が指名 1898－1930年 国家体制の樹立－法制また経済秩序の建設[5)] いわゆる〔Política dos governadores〕の設定	カンポス・サーレス 1898年 〜 1902年 州統領政治－エリートによる寡頭政治	ローザ・イ・シルヴァ（PE）	内法相エピタッシオ・ペッソーア（PB） 蔵相ジョアキン・ムルチーニョ
＊カンポス・サーレスが指名	ロドリゲス・アルヴェス 1902年 〜 1906年	シルヴィアーノ・ブランダン（MG）1902年死亡 ↓ アフォンソ・ペナ（MG）	内法相ジョゼ・ジョアキン・セアブラ（BA） 産業相ラウロ・セベリーノ・ムレール（SC） 外相リオ・ブランコ男爵（RJ）
＊ルイ・バルボーザ，カンポス・サーレス，ピニェイロ・マッシャード等立候補者間の政争への和解策としてアフォンソ・ペナを指名	アフォンソ・ペナ 1906年 〜 1909年 経済的にはcafé com leiteの形成	ニーロ・ペッサーニャ（RJ）	外相リオ・ブランコ男爵 陸相エルメス・フォンセッカ陸軍元帥（RS） 海相アレッシャンドリーノ・ファ

リア・デ・
アレンカー
ル海軍提督
（RS）

インディオ保護局を
開設し，同化政策を
とる

ニーロ・ペッサ
ーニャ
１９０９年昇格
〜
１９１０年

外相リオ・
ブランコ男
爵

海相アレッ
シャンドリ
ーノ・ファ
リア・デ・
アレンカー
ル海軍提督

＊PRC※とMG，RSがエルメスを推す
PRP及びBAなどが対立候補ルイ・バルボーザを推す
１９１０－１９１８年断続する動乱[6)]

エルメス・フォンセッカ
１９１０年
〜
１９１４年

ヴェンセスラウ・ブラス（MG）

産業相ジョゼ・ジョアキン・セアブラ

外相リオ・
ブランコ男
爵１９１２
年死亡

外相ラウロ・セベリーノ・ムレール
海相アレッシャンドリーノ・ファリア・デ・アレンカール海軍提督

＊PRCとMG＋SPの与党との間の政争を斡旋
SPは最初カンポス・サーレスを推し，

ヴェンセスラウ・ブラス（MG）
１９１４年
〜

コスタ・アラウジョ（MA）

産業相ジョアン・バンディアー・カロジェラ

PRCはビニェイロ・マッシャードを推す	１９１８年 ビニェイリズモ（PRC）の終焉 －１９１５年 第１次世界大戦期－ブラジル経済の繁栄期		ス（RJ） 外相ラウロ・セベリーノ・ムレール ↓ 外相ニーロ・ペッサーニャ（RJ） 海相アレッシャンドリーノ・ファリア・デ・アレンカール海軍提督
	（ロドリゲス・アルヴェス　大統領に当選 しかし病気－死亡） ↓		
１９１８－１９３０年 動乱期[7] 特に１９２３年のRS州及び１９２４年のSP州の革命	デルフィン・モレイラ（MG） 副大統領から大統領に昇格 １９１８年 ～ １９１９年		内法相コスタ・アラウジョ
＊MG, SP, RSの与党の協定によりエピタッシオ・ペッソーアを指名 対立候補ルイ・バルボーザ	エピタッシオ・ペッソーア（PB） １９１９年 ～ １９２２年	デルフィン・モレイラ１９２０年病弱－死亡 ↓ フランシスコ・バイヴァ（MG）	陸相及び海相ジョアン・バンディアー・カロジェラス
＊前大統領及びSP, MGがベルナルデスを推す エルメス・フォンセッカ，RSそして軍部	アルトゥール・ベルナルデス（MG） １９２２年 ～ １９２６年	エスタッシオ・コインブラ（PE）	陸相及び海相アレッシャンドリーノ・ファリア・デ・アレンカール海軍提督

はニーロ・ペッサーニャを推す			アレンカールの再三の海相就任が陸・海軍の争いを和解させる
＊PRP※※の強力な推薦対立候補なし	ワシントン・ルイス（RJ－SP） １９２６年 〜 １９３０年	フェルナンド・ヴィエイラ（MG）	蔵相ジェツリオ・ドロネーレス・ヴァルガス（RS）１９２８年RS州統領就任
＊SPなど１７州がジュリオ・プレステスを支持　残り３州――MG, RS, PBが自由同盟を結成し，ジェツリオ・ヴァルガスを推す	ジュリオ・プレステスが大統領に当選（１９３０年1月３０日）		
１９３０年１０月－テネンティズモ革命〔Segunda República〕	ジェツリオ・ドロネーレス・ヴァルガス（臨時政府の首長）		

註

※ＰＲＣ＝Partido Republicano Conservador
（１９０９年創設）

※※ＰＲＰ＝Partido Republicano Paulista
（1873年結成し理事会は１８９６年以降活発化する）

-------> 死亡に伴う新人の就任を示す

――――> 同一人物の重要職への就任，再任を示す

ＳＰ＝サン・パウロ州，ＭＧ＝ミナス・ジェライス州，ＲＳ＝リオ・グランデ・ドスル州，ＲＪ＝リオ・デ・ジャネイロ州，ＰＢ＝パライーバ州，ＰＥ＝ペルナンブコ州，ＡＬ＝アラゴアス州，ＢＡ＝バイア州，ＭＴ＝マット・グロッソ州

ところで，ブラジル史における１８８９年から１９３０年までは多くの歴史家によって一般に第一次共和制時代と呼ばれ，現在では旧共和政体期と呼ばれている。[8] この旧共和制時代は特権的寡占政治――それはしばしばエリート時代と呼ばれる――を特徴としており，これは第三代大統領カンポス・サーレスによる州統領政治＜Política dos governadores＞[9]の制定と次の大統領ロドリゲス・アルヴェスによるその具体化とに基づくものである。その後これは１９３０年革命によって崩壊することになるが，当時としてはこの体制は政治的，経済的諸事情からやむをえなかったものと思われる。[10]

さて以上の系譜図を一覧するとき，大統領は初期の軍人体制以後，有力者に指名されて立候補し，そして国民投票によって選出されるのであるが，有力な政治家，例えばピニェイロ・マッシャード（RS）のPRC「保守共和党＜Partido Republicano Conservador＞」[11]を背景とした推薦がカンポス・サーレス以後は支配的であり，なお引き続いてエルメス・ダ・フォンセッカの大統領選挙時の１９１０年に顕著であった。しかしヴェンセスラウ・ブラス（MG）政権（1914－1918年）当時からピニェイリズモが急速に衰え，[12] 伝統的特権的性格[13]から次第に大州の有力政党の推薦による政党主義に移行していったのである。

次いでその間の経過をやや詳細に論ずるならば，諸州と連邦政府との関係については，やはり大州[14]としてのSP，MG及びRSの三州のそれぞれのヘゲモニー間の闘争であったとみられる。中でもRSが孤立化の様相を示して，特にSPとの大統領立候補者の推薦をめぐる対立が顕著であって，これが１９２３年のRS及び１９２４年のSPの革命という形であらわれる。しかしながらこうした対立は協定及び和解によってかろうじて平穏を保っていたが，大州の分裂は次第に激しくなりつつあったことは否定できない。

そこでこのような三大州の対立と分裂傾向に際して軍人大統領として登場した陸軍元帥エルメス・ダ・フォンセッカへの政治的課題が問題となってくる。いいかえればこうした分裂を防止してブラジルの統一をいかに実現するかが要

求されたのであって，このためにエルメス・ダ・フォンセッカは国軍を背景としての各州への干渉を開始するものの，SPとMGは，その私兵的実力をもってこれに反抗し彼らの実力を示すことになる。より具体的にはエルメス大統領は各州の伝統的な支配グループに代って中央政権に忠実な国軍及び各州の非伝統的エリートの登用を意図して北部及び北東部全州さらにはRJ州にまで一連の軍事的干渉政策を行なうことになる。しかしこのMG, SP, RSに対しては強力な州軍とその干渉をはねつける市民戦の可能性とを擁していたために，軍事的干渉は失敗に終ったのである。

陸軍元帥エルメス・ダ・フォンセッカが大統領の任期を終えるにあたって，SP及びMG州とこれ以外のRSを中心とする州との間で次期大統領指名問題が起ったが[15]，結局，エルメス政権の時に副大統領を務めこれ以前にはMG州統領であったヴェンセスラウ・ブラスが各州対立の調停策として指名され，国民選挙でも当選した。ブラスは大統領就任中にもRS（PRC）とSP（PRP－「パウリスタ共和党 Partido Repulicano Paulista」）＋MG与党間の和解に努め事態は平穏に推移した。続いて次期大統領に当選したロドリゲス・アルベスの病死と当然大統領に就任すべき副大統領デルフィン・モレイラの病弱とが原因となって一時政界は混乱した。しかしながら，１９１９年４月に大統領選挙が実施され，パライーバ州のエリートであるエピタッシオ・ペッソーア[16]が三大州MG, SP, RSの与党間の協定によって指名され，対立候補ルイ・バルボーザ[17]（BA）を破って選出されることになる。この大統領就任に際してエピタッシオ・ペッソアは，将来の大統領選挙時にはMGのアルトウール・ベルナルデスと次いでSPのワシントン・ルイスとを指名することを大州に対して保証したといわれる。熱心な文化人であったエピタッシオ・ペッソーアは軍政を嫌って陸相及び海相に２名の文官を指名したが，こうした彼の高圧的政治姿勢がいくつかの州及び軍との衝突を招き，それに財政状態の悪化が加わって大統領の後継者選びが早められることになった。SPとMGのエリート・グループはアルトゥール・ベルナルデスを支持し，RSのエルメス・ダ・フォンセッカと軍部とは保守的共和運動の創始者の元大統領ニーロ・ペッサーニャを推したが，この両グループ間の不和は１９２２年６月のコパカバーナ要塞の反乱をはじめとして一連の紛争を引き起した。大統領選挙はアルトゥール・ベルナンデスの勝利に終るが，その大統領就任は議会による戒厳令下においてであった。彼は多くの政敵を戒厳令によって中央政

界とくに議会から追放し，さらには新聞などの印刷物規制法を発布し，地方的反発運動例えばプレステス隊の革命運動を押えて任期終了まで強行手段をとったのである。このアルトゥール・ベルナルデス政権時（１９２２－１９２６年）にSPの州統領と上院議員とを各々２年間づつ務めていたワシントン・ルイスがPRPの協定に基づく三大州の全与党の支持を得て大統領に立候補して当選した。ワシントン・ルイス政権下にあっては幾多の矛盾を内包しながらも，SPの特産であり世界的商品であったコーヒー経済の安定が続く限り，コーヒー貴族の支持によって政権が維持され，表面的には一応平和に推移する様相であった。しかし１９３０年に近づくにしたがって，世界恐慌の波がブラジルにも波及しコーヒー経済の基盤がその価格の下落によって崩壊してゆくなかで，同政権の宿命的終焉がもたらされるのである。特に彼の後継者問題がもちあがった時，さきに説明したSP, MG, RS の三大州を中心とする旧共和政体下のエリート体制に重大な分裂が生じることになる。すなわち次期大統領候補に他の大州を犠牲にしてSPのコーヒー経済を防衛するためにSP州統領（１９２７年就任）のジュリオ・プレステスが，ワシントン・ルイス大統領の推薦とSP州をはじめとする１７の州の支持を得て指名されたが，残りの有力州であるMG, RS及びPBの三州がこれに反対して自由同盟を結成し，対立候補としてRS州のジェツリオ・ヴァルガスを推薦することになる。１９３０年１月の大統領選挙ではジュリオ・プレステスが大差で勝ったものの，MG, RS, PB の三州は選挙が公正でなかったとしてその結果に強く反発した。そして同年７月自由同盟のジョアン・ペッソーアが暗殺されるに至って分裂状態はさらに激化し，かねがね政界に不満を抱いていた全国の下級士官を先頭とする革命が１０月３日に勃発し，その時までワシントン・ルイス大統領を支持していた国軍も彼の辞任を求めてついに革命軍によって支持されたRSのジェツリオ・ヴァルガスに政権を引き渡したのである。このことによって旧共和政体下のSP, MG, RS 三州を中心としたエリート体制は崩壊し，以後RSのジェツリオ・ヴァルガスによる国家統一が推し進められることになったのである。[18)]

旧共和制時代の特徴としてそれが末期に近づくにしたがい極めて複雑な社会的経済的さらには政治的様相を示すが，それでも連邦政府を中心とするエリート体制はさきの図に示されるように推持されてきたことが明らかである。

註

1) 大統領の権限は，全閣僚の指名権，行政上の最終決定権，最高裁判所長官の任命権などであるが，詳しくは第一次憲法をみていただきたい。なお第一次憲法の全文は*Todas as Constituições do Brasil*, São Paulo, 1977, pp. 459～514に掲載されており，その要約は今西正雄「ブラジル法制史の一考察――1891～1969――」『COSMICA』（京都外国語大学）Ⅵ号，30－31ページを参照されたい。

2) この固有名詞は，ブラジルの高等学校最上級テキストにおいて普遍化している。

参照：Séraio Buarque de Holanda, *História do Brasil 2 : da Independência aos nossos dias*, 3. ed.São Paulo, 1975., Lage & Moraes, *História Fundamental do Brasil : Estudo dirigido e pesquisa*, vol . 2 , Belo Holizonte, 1972.

3) 参照：Sérgio Buarque de Holanda, *op.cit.*, pp. 61～68.

4) 参照：Edgard Carone, *A República Velha* Ⅱ : *evolução política* (1889－1930), 3. ed., São Paulo, 1977. pp. 151～266.

5) 参照：Sérgio Buarque de Holanda, *op. cit.*, pp. 68～70.

6) 参照：Edgard Carone, *op. cit.*, pp. 269－327.

7) 参照：Carone, *ibid.*, pp. 331－438.

8) この時代区分について，セルジオ・ブアルケ・デ・オランダ，ジョゼ・マリオ・ペーロ，エドガー・カローネ教授等の意見は一致している。

9) 州統領政治（斉藤広志教授はこれを「州統領本位の政治」と呼んでいる。参照：斉藤広志，中川文雄「ラテンアメリカ現代史」165ページ）とは，連邦政府が各州の統領によって指名された下院議員及び上院議員を，彼らが政府の通常の政策を支持する，ということと引き換えに認めることであって，これは州統領に対して政治的特権を与えることになった。またこの体制はほとんどの連邦議員の政治ボスであるピニエイロ・マッシャードの協力を得て体制化されたのである。

10) 厖大な土地と，通信・交通の不便さ，さらに経済的格差，また1891年憲法によって規定された各州自治権の強化などの状況が，このような

体制を要求したといえよう。

11) RS出身の上院議員ピニェイロ・マッシャード＜José Gomes Pinheiro Machado＞によって設立された。ピニェイロ・マッシャード（１８５１－１９１５年）はRSの大牧場主の息子であり，士官学校で学びパラグアイ戦争（１８６４－１８７０年）で闘った。１８７８年にサン・パウロ法科大学を卒業し，その時学友達と急進的共和クラブ（Clube Radical Republicano）を設立する。次いで１８７９年にRSに戻りRS 共和党（o Partido Republicano Rio－Grandense）を創設した。彼はRS の政治ボスであるジュリオ・デ・カルロスの熱烈な共鳴者であって，連邦主義者革命（１８９３－１８９５年）に参加して革命軍を破って輝かしい勝利をおさめ，陸軍大佐となる。その後，大牧場主を続けるかたわら，上院議員に選出され，その時（１９０９年）にPRC（Partido Republicano Conservador）を設立したのである。PRC を基盤に彼は州統領政治の体制においてカンポス・サーレス以後エルメス・ダ・フォンセッカに至る各大統領をはじめとして，政界の有力者また党派グループに対して勢力を揮い強力な政治的仲裁者の役を果したのである。しかしヴェンセスラウ・ブラス政権下の１９１５年９月暗殺され，このことがその後の政界にひとつの変化をもたらしたのである。

12) ピニェイリズモ＜Pinheirismo＞とは上院議員かつ陸軍元帥ピニェイロ・マッシャードの政党及び彼個人のRS州政府及び連邦政府内における勢力，影響力のことをいう。１９１３年から１９１８年の期間は第一次世界大戦の時期でブラジルにあっては新興ブルジョアジー――工業主義を代表とする新資本主義――勃興が顕著となり，これが旧体制をあくまで保守的に維持しようとするピニェイリズモに対して批判運動をおこしたのである。

13) さきの註9）を参照のこと。

14) ここでの大州（Grandes Estados）とはMG，SP，RS の三州のことである。それは最多数の人口と最多数の議員数とを擁する州のことをさした。（*Novo Dicionário de História do Brasil*, São Paulo, 1971. p. 471）

15) SP州とMG州はSP州出身の元大統領カンポス・サーレスを擁し，RS

州及びその他の州がRS州出身のピニェイロ・マッシャードを推薦した。

16) エピタッシオ・ペッソーアは１８６５年陸軍中佐の息子としてパライーバに生まれる。パライーバ州の政治ボスであるヴェナシオ・ネイヴァが彼のおじにあたるし，さらには母方のおじもまた１８９１年のデオドロ・ダ・フォンセッカ政権時に内相，産業相そして蔵相を務めたペルナンブコ州のルセーナ男爵（Henrique Pereira de Lucena）であって，エピタッシオはまさしく大地主的地方エリートの典型であったといえよう。８歳で孤児となるがルセーナ男爵に引き取られて，１８８６年にレシーフェ法科大学を卒業する。１８９８年にはカンポス・サーレス政権において法相に指名され，民法の編纂に積極的に取り組むことの他に，州統領本位の政治への有力な協力者となる。引き続いて１９０１年に最高裁判所長官に指名され，国際法を検討するかたわら１９１２年までその任に就いた。次いで１９１２年と１９１５年とに上院議員に選出され，１９１９年には指名を辞退したルイ・バルボーザに代ってヴェルサイユ平和会議のブラジル代表として渡欧したが，その期間中に新しく大統領に当選したロドリゲス・アルヴェスが死亡したために，続いて同年４月に大統領選挙が行なわれ，エピタッシオ・ペッソーアが当選したのである。なお，パライーバ州のエリート構造については，前掲の拙稿『COSMICA』（京都外国語大学）Ⅶ号，１３３－１３４ページを参照していただきたい。

17) ルイ・バルボーザ＜Rui Barbosa de Oliveira＞は１８４０年BA州の首都サルヴァドールに生まれ，１９２４年RJ州のペトロポリスで死亡した。彼はレシーフェ法科大学とサン・パウロ法科大学で法律学を専攻し１８７０年後者を卒業した。共和革命以後の１８９１年憲法草案の編集に際しては検閲官の地位にあり，第一次憲法の性格には彼の思想が強く反映しているといわれる。続いて１８９０年には上院議員に選出され，１８９３年にはジョルナル・ド・ブラジル紙（Jornal do Brasil）の編集長を務めた。その頃彼はブラジル民法草案の完成を託されていた――この時彼はRJ市の彼の住居に法律図書館を創立し，これが「ルイ・バルボーザの家Casa de Rui Barbosa」の民法局として今日まで残っている――が，同時に旧共和政下のエリート体制に強い思想的影響を与えた

民法学者運動<Campanha Civilista>を指導した。ルイ・バルボーザはこの運動を基盤として幾度も大統領選挙に立候補したが，一度も当選しなかったのである。彼が常に選挙に破れたのは，結局，旧共和政体の寡占的エリートがルイ・バルボーザを推薦また指名しなかったことに帰せられるが，その理由は優れた法学者としての彼の能力と政治工作を軽侮する政治姿勢とがエリート・グループから恐れられたからに他ならない。（参照：José Maria Bello, *História da Repablica*：1889－1954, 7. ed. São Paulo, 1976. p. 243., *Novo Dicionário de História do Brasil*, São Paqlo, 1971. pp. 81～84）。

18) 以上第一章及び第二章における歴史的事実については，主として次の2冊の文献を資料的裏付けとした。*Almanaque Abril*, São Paulo, 1977. pp. 45－80., *Novo Dicionário de História do Brasil*, São Paulo, 1971.

第二章　大統領を中心とする分析

前章では連邦政府のエリート的組織を中心に分析してきたがさらに進んで，その頂点にある大統領の出身別，それから種々のエリート的性格，学歴，州統領，連邦議員，閣僚，この他の名誉職の有無という点から考察してみよう。くりかえすようではあるが，エリートとは「優れた資格と強力な権力をもち，ある集団内で支配的でまた名声のある少数者」であり，ブラジルでのそれは，門閥，一流大学――とくに法学科出身――，富裕者層――砂糖，コーヒー，棉花などの農園の大地主――，両院議員，その他の名誉職などの家族グループから特徴付けることができる。以上のことを種々の角度からそれぞれに指摘してゆけばあまりに煩雑になるおそれがあるから，前章にならってこれを以下の表で示すことにした。[1)]

大統領[2)]（就任順）	出生州	家族	最終学歴	就任または立候補前の職歴			
				州統領	連邦議員	閣僚	その他の名誉職
デオドロ・ダ・フォンセッカ	AL	軍人名門	士官学校	RS	×	×	軍人クラブ会長
フロリアーノ・	AL	父方のおじ砂糖	士官学校	MT,	×	陸相	同上,

ペイショット		農園主一養父		AL			副大統領
プルーデンテ・デ・モライス	SP	軍隊長の息子，コーヒー貴族	SP法科大	SP	×	×	共和国憲法草案室長
カンポス・サーレス	SP	大コーヒー農園主の息子	SP法科大	SP	×	法相	×
ロドリゲス・アルヴェス	SP	ポルトガル商人の息子，コーヒー貴族	SP法科大	SP	×	蔵相	×
アフォンソ・ペナ	MG	—	SP法科大	MG	上院議員	×	副大統領
ニーロ・ペッサーニャ（昇格）	RJ	—	レシーフェ法科大	RJ	上院議員	×	副大統領
エルメス・ダ・フォンセッカ	RS	デオドロ・ダ・フォンセッカのおい，軍人名門	士官学校	×	×	陸相	RJ警察隊司令官，公立戦術予科学校長
ヴェンセスラウ・ブラス	MG	—	SP法科大	MG	下院議員	×	MG内務長官
デルフィン・モレイラ（昇格）	MG	—	SP法科大	MG	下院議員	×	MG内務長官
エピタッシオ・ペッソーア	PB	陸軍中佐の息子，母方のおじLucena男爵一養父，砂糖地主	レシーフェ法科大	×	上院議員	法相	最高裁判所長官，ヴェルサイユ平和会議ブラジル代表
アルトゥール・ベルナルデス	MG	—	SP法科大	MG	下院議員	×	×
ワシントン・ルイス	RJ	陸軍中佐の息子	SP法科大	SP	上院議員	×	SP市長

（註）×印は該当しないことを示す。

まず大統領の出身からやや具体的に考察していくと州別ではALから2名, SPから4名, MGから4名(昇格者を含む), RJから1名(昇格者), RSから1名, PBから1名が見出される。このことはブラジルの伝統的また社会的経済的変動の一端を示すもの[3]であり, ALは植民地時代及び帝政時代を通じて地主的軍人名門によって固められていたし, SPとMGはいうまでもなく, コーヒーと牧畜とで知られる超大州であって, 一般に言われる大統領のたらい回しが[4]行なわれた支配的地位にあったのである。そしてエドガー・カローネ教授によると, ブラジルのエリート的ヒエラルキーの頂点に立つ大統領の社会的基盤はほとんど大地主であったと規定されているが, 大統領のうちでフロリアーノ・ペイショット[5]を除いては, まさしくその通りである。

次いで学歴については, 軍人であれば正規士官学校出身, 市民であれば当時最も権威のあったサン・パウロ法科大学, あるいは伝統的にレシーフェ法科大学を卒業することが一応の資格として考えられていた。さらに, 州統領またはこれに匹敵する役職を経験していることが大統領への指名また就任への資格として一応認められていたといえる。また連邦政府内においては, 上院並びに下院議員も当然考慮され, その他, 主要閣僚及びそれ以外の名誉職などがいずれもエリート的資格の一部をなすものであった。

ところで前章から本章にかけてしばしば「主要閣僚」という字句を使用したが,[6] 旧共和制時代における「陸相」は軍の最高責任者であって, 数々のブラジル国内における各州間の動乱に国軍を活躍させ動乱を鎮圧したのであり, さらにまた, アルトゥル・ベルナルデスの大統領就任にあたって勃発したクーデターなどにおける軍部——陸相——の立場と役割には実に無視しえないものがあった。次いで「法相」はブラジルのような種々の移民で形成された新大陸で, しかもこれを近代国家に形成せんとする国家にあっては, その法的秩序が極めて重要になるために, 彼の権力は非常に巨大であった。とくにこの時期にあっては, スペイン, ポルトガル, その他の外国移民の増加からくる[7]多様で複雑な状況を統一させるための法的秩序の重要性を考慮しなければならない。さらに社会的, 経済的な面から言えば「蔵相」は, 国内の資本投資——ことに国内の道路建設——, 外国債の支払い, また連邦政府内の給料の支払い, 経常予算などの決定権——当然のことながらこれらの最終決定権は大統領にあったが——その他ブラジル銀行<Banco do Brasil>の指導権などを握っていたのであっ

て，その地位は極めて重要であったのである。これらの閣僚の系譜については，第一章の諸表においてすでに示したところである。

註

1) この表は*Almanaque Abril*, São Paulo, 1977の名士録（pp. 59～65）と*Novo Dicionário de História do Brasil*, São Paulo, 1971とを参考文献として作成したものである。

2) 表では大統領の名前を片仮名であらわしたが念のために以下就任順に原文であげておこう。

1 Manuel Deodoro da Fonseca デオドロ・ダ・フォンセッカ，2 Floriano Peixoto フロリアーノ・ペイショット，3 Prudente de Morais Barros プルーデンテ・デ・モライス，4 Manuel Ferraz de Campos Sales カンポス・サーレス，5 Francisco de Paula Rodrigues Alves ロドリゲス・アルヴェス，6 Afonso Augusto Moreira Pena アフォンソ・ペナ，7 Nilo Peçanha ニーロ・ペッサーニャ，8 Hermes Rodrigues da Fonseca エルメス・ダ・フォンセッカ，9 Venceslau Bras Pereira Gomes ヴェンセスラウ・ブラス，10 Delfim Moreira de Costa Ribeiro デルフィン・モレイラ，11 Epitácio da Silva Pessoa エピタッシオ・ペッソーア，12 Artur da Silva Bernardes アルトゥール・ベルナルデス，13 Washington Luís Pereira de Sousa ワシントン・ルイス.

3) 当時のSP州はコーヒー価格の暴落などによる不況を経験しはしたものの，肥沃で広大なテラ・ロッシャ，欧州からの大量の移民労働者の登場，さらに外国からの資本投資などが相俟って急速に発展していた。またMG州は，南西部のコーヒー産業に代って急速に台頭してきた鉄鉱業，そして牧畜業を基盤として，さらにはまた奥地への最も重要な中継地として安定した成長を遂げつつあった。特に新都市ベロ・オリゾンテの発展がこれを象徴している。

4) 参照：斉藤広志，中川文雄「ラテンアメリカ現代史」（山川出版社），168～170ページ。

5) 1839年にAL州の小さな町の貧農の子として生まれるが，10歳の時，砂糖農場主であるおじのコロネル・ジョゼ・ヴィエイラ・デ・アラ

ウージョ・ペイショットの養子となる。それ以後リオ・デ・ジャネイロの学校で勉強を続け，次いで陸軍士官学校で学ぶ。１８６３年に陸軍中尉となりパラグァイ戦争に参加し，非常に勇敢に闘って多くの功績をたて，全軍の信望を集めるなかで陸軍中佐に昇進した。続いて１８８９年には陸軍大将となり，臨時政府の陸相，次いでデオドロ・ダ・フォンセッカ政権の副大統領を務め，ついに１８９１年共和国大統領に選出されたのである。１８９４年に任期を終えたがその翌１８９５年にRJ州の一農園にて死亡した。フロリアーノ・ペイショットは貧しい家庭に生まれたが，その死に際しては国葬が行なわれたのである。（参照：José Maria Bello, *História da República*：1889－1954, 7. ed. São Paulo, 1976. pp. 82～95.

6) 旧共和政体下の内閣及び閣僚については，*Almanaque Abril*, pp. 75～78を参照されたい。

7) 旧共和制時代の国籍別ブラジル移民統計を掲げておこう。

期間＼国籍	ドイツ人	スペイン人	イタリア人	日本人	ポルトガル人	ロシア人	その他	合計
1884—1893	22,778	103,116	510,533	—	170,621	40,589	36,031	883,668
1894—1903	6,698	93,770	537,784	—	157,542	2,886	63,430	862,110
1904—1913	33,859	224,672	196,521	11,868	384,672	48,100	106,925	1,006,617
1914—1923	29,339	94,779	86,320	20,398	201,252	8,196	63,697	503,981
1924—1933	61,728	52,405	70,177	110,191	233,649	7,953	201,120	737,223

（出所）*Almanaque Abril*, São Paulo, 1977. p. 162.

イベリア半島のポルトガル人とスペイン人を除くと，移民数では，イタリア人，ドイツ人，日本人の順位となっており，ここにその後の異民族混淆社会としてのブラジル社会の行方をうかがうことができる。

結び

以上要約すれば旧共和政体期の連邦政府の構造は，閉鎖的エリートの系譜によって形成されていたといえよう。特に，最高の権威をもつ大統領及び有力州のエリート・グループの推薦さらには指名に大きく影響されていたのである。そのため旧共和制時代をいわば特権的寡占体制の時代と呼ぶことができるので

あるが，これを第一章及び第二章の図表によって示さんとしたものである。そのエリート的寡占体制は結局，第三代大統領カンポス・サーレス（SP）の「州統領本位の政治」の設定と，続くロドリゲス・アルヴェス（SP）大統領によるその完成及び具体化とを基盤として，連邦政府内の立法・行政機構に定着したのである。

ところでその寡占体制の中心は，大農園主及び大牧場主に支持されたSP，MG，RS三大州のエリート・グループであったのであり，互いの関係は連邦政府の支配をめぐる協調と闘争のくりかえしであった。次いで旧共和政体がその末期に近づくにしたがって，表面上はかろうじて平穏を保っていたものの，SP，MG，RS三大州の分裂が次第に激しくなっていったのである。そしてついに，第一次共和制最後の大統領ワシントン・ルイスの後継者問題が契機となって，１９３０年革命が勃発し，SP，MG，RS三大州を中心としたエリート体制が崩壊したのであって，これ以後，RS州出身のジェツリオ・ヴァルガスによる国家統一が進められることになったのである。

本稿では，そうした変化の中にあっても旧共和制時代においては，さきのエリート的寡占体制が維持されていったことに注目したのである。さらにまたエリート的性格をよりいっそう明確にするため大統領の出自に焦点を合わせたが，彼らのすべてが大地主もしくはその家系に属し，出身州もSPとMG両州が圧倒的に多いことが理解された。また，学歴については，軍人であれば正規の士官学校，市民であればサン・パウロ法科大学あるいはレシーフェ法科大学を卒業することが大統領への資格であり，政界での経歴については，州統領かそれに相当する地位かを経験し，また連邦議員であることが必要であったのである。

なお，中央エリートの基盤となった過去の伝統的地方エリートの典型を前掲の拙稿（本稿の「はしがき」を参照のこと）で整理したが，本研究にも関連するのであえて次に掲載することにした。

州別	エリート類型	主要産業
AL	家族型	砂糖，棉花，牧畜
PB	家族型＋友人型	砂糖，棉花，牧畜
PE	友人型	砂糖，棉花，牧畜
CE	家族型	棉花，牧畜
RN	家族型	砂糖，棉花，牧畜
BA	更迭型	砂糖，鉱業，牧畜
PA	伝統的家族型	ゴム，牧畜
MT	家族的地方ボス型	鉱業，牧畜
SP	政党型＋コーヒー地主型	コーヒー，牧畜
RJ	連邦政府密着型＋外交型	砂糖，コーヒー
MG	伝統的家族型（王党派）＋多数型＋連邦政府密着型	鉱業，コーヒー，牧畜
RS	軍人型＋政党型	牧畜

（参考）拙稿「ブラジル旧共和政体期の一考察　そのエリート体制の構造的分析」『COSMICA』（京都外国語大学）Ⅶ号，1978．146ページ。

さて，以上で第一次共和政体期いわゆる旧共和制時代の観察をひとまず終えて，次いで第二次共和政体期すなわちヴァルガス期の研究に進む予定である。

〔主要参考文献〕

1 Edgar Carone, *A República Velha*－I：*Instituições e Classes Sociais*. São Paulo, 2. ed. 1972.

2 Idem, *A República Velha*－II：*Evolução Política* (1889－1930). São Paulo, 3. ed. 1977.

3 Idem, *A Primeira República* (1889－1930) (*Texto e Contexto*). São Paulo. 3. ed. 1976.

4 Jose Maria Bello, *História da República*：1889－1954. São Paulo, 7. ed. 1972.

5 *Almanaque Abril* － 1977, São Paulo, 1977.

6 *Novo Dicionário de História do Brasil*. São Paulo, 2. ed. 1971.

7. Paulo Sérgio Pinheiro, "Classes Médias Urbanas: Formação, Natureza, Intervenção na Vida Politica." In: *História Geral da Civilização Brasileira — tomo* III: *O Brasil Republicano* — 2. vol. Rio de Janeiro — São Paulo, 1977.